

DOG DAYS —もう1人の
英雄—

アスティオン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

地球とは隔絶した異世界フロニヤルド

そして地球日本に住む少年シンク・イズミと天月統夜《あまつきとうや》

この2人が異世界フロニヤルドへと召喚される

彼らの愛と勇気と、耳としつぽの物語

始まります

目次

勇者召喚

初陣

1

13

勇者召喚

ー日本 紀ノ川市ー

「んん、もう朝か…」

カーテンの隙間から覗いてる光が眩しく、俺は目が覚めた。

俺の名前は、天月 統夜《あまつぎ とうや》

ここ、紀ノ川市の生まれで13歳、中1だ。

「統夜く、早く学校行こうよ」

「あー、ちよつと待て。すぐ支度するから」

つたく、自己紹介くらいさせてくれよ。

とにかく待たすのもあれだから素早く着替えて…

「ういーっす」

「おはよう統夜」

「おはよシンク」

「おはよう統夜、もしかしてさっき起きたでしょ？」

「おはよベツキー、まあ10分くらい前だな」

外で待っていたのはこの2人、俺の友達シンク・イズミとベツキーことレベツカ・ア
ンダーソン。

この2人とは小学生の頃仲良くなった。シンクとベツキーは幼馴染のようだ。

「ああ、そういうやシンク。今日だっけか出発？」

「うん、終業式途中で抜けてね」

「そっか、統夜も行くんだっけ？イギリス」

「うん、まさか統夜も来るとは思わなかったよ」

「いいだろ、たまには」

実は今日は、3学期の終業式で明日から春休み。

俺とシンクは、シンクの故郷イギリスに旅行に行くことになった。

言っただけでなく、シンクは日本人の父とイギリス人の母のハーフだ。そして今彼の両親は世界中を飛び回っている。

といっても旅行というよりシンクは里帰りで向こうで練習がしたいとのこと。

シンクの趣味はアスレチック。毎年行われているアイアン・アスレチックという大会で優勝するという目標があるようだ。

俺はただ、暇だったしイギリスに行こうかなという理由だけ。

そんなこんなで俺たちが通う学校、紀ノ川インターナショナルスクールに着いた。

「ああ、そうだ。忘れてた」

「なに？」

「春休みの最後の3日間、ベッキーのお父さんとお母さん暇？」

「どうかな？なんで？」

「うちの父さん母さん戻ってくるから、一緒に和歌山の別荘に行かないかって。あと統夜も来るよ」

和歌山に別荘って…、やっぱりこいつの両親ハンパねえ…

出掛けようとは聞いてたが別荘までは聞いてねえぞ…

「ほんと？」

「うん、七海も来るんだって」

七海とは、シンクの従姉で2歳年上って言ってたな。

確か、高槻七海だったな。今はロンドンに住んでるようだ。

俺も何回かはあったことある。

「ちようどお花見の季節だし、お父さんとお母さん忙しそうだったらベッキーだけでもって」

「そ、そう…。でもやーよ？いつかみたいに私を放つといてアスレチック遊びとか棒術（ごっこ）ばかりとか…」

お前…、構ってやれよ…。ベッキー可哀想だろ…

「平気！前日までにボロボロになるまで特訓しとくから！」

なんで目輝かせてんだよシンク…

「う、うん…。あんま無茶苦茶しないようにね…」

「安心しろ、一応俺もいるし危なくなったら止めるからよ」

「うん、お願いね統夜」

まあ、こいつの場合は無茶がいつものことつてゆるかなんとゆるか…、止める側の気持ちも考えてくれよな…

「あつ、そろそろ時間。それじゃベッキー、予定空けといてね。行こう統夜」

「おう、じゃあなベッキー」

「うん、メールする」

俺たちはそれぞれの教室へと走った。

後ろに不思議な剣を咥えた犬がいることを気づかず…

修了式途中、俺とシンクは静かに抜け教室に荷物と取りに行き、俺は先に下で待っている。

シンクはというと…、2階の踊り場から降りようとしている。

まったく、派手好きなやつだな…

「お前、ここで怪我しても知らねえからなー？」

「だいたいよくぶ、平気だよ」

そしてシンクは鞆を空中に投げ、飛んだ。

もう見慣れてるからあんま驚かないが、他人からしたらビックリするだろうな…

シンクが飛んだ瞬間、俺の背後から何かが通り過ぎた。

「ん？あれは…、犬？」

犬だった。なんとシンクの着地地点に向かって走っていた。

するとその犬は咥えていた剣を地面に突き刺してた。

すると、魔方陣みたいなものが出てきた。その中心はどこかに繋がってるかのようなものに。

「ええっ!?!」

「おいおい、なんだよこれ!?!」

ヤバい、しかもあいつシンクの真下にやりやがった。このままじゃ…

「くそ…、シンク!!」

俺は急いで駆け寄り、シンクの腕を掴もうと伸ばしたが届かず、俺も魔方陣の中へと入ってしまった。俺たちは吸い込まれてしまった。

「うわあああ!!」

「つたた…、ここどこだ…？」

気がつく俺は、知らない森の中にいた。

「確か、俺たちは学校にいて、変な犬が魔方陣みたいなの出して、そしたら…。つてシンク？おいシンク！」

シンクがいない。まさか逸れたのか。

でもここは何処だかわかんねえ、とりあえず進むか。そしたらシンクに会えるかもしんねえ。

歩き始めること数分…

一向に森を抜けられない。

「それにしてもここ何処なんだ…。早くシンクも見つけないとだし…。——ん？なんだこの音…？」

森を進んでいるとなにやら音がする。

もしかしたら人が…！

なにか情報が得られるかもしれない。

俺は走り出した。

どンドン音が大きくなっていく。

抜けた…！森を抜けた…！…って

「あれ…？」

抜けた先には人はいた。だが…

「お主、何者じゃ？」

なんか女の人に剣向けられてる…

つて、猫耳？尻尾!?

「え、ええつと…」

「お主、名は」

「あ、天月統夜です…」

「統夜…、何処かで聞いたことあるような…。わしはレオン・ミシエリ・ガレット・デ・ロワ。閣下と呼べ。それより貴様、なぜここにおる？見たところ異世界の人間のようだが」

とにかく今は現状を説明しないとこの状態をどうにかしないと…

―説明中―

「そうか、つまりお主は勇者召喚というものに巻き込まれたようじゃな」

「勇者、召喚…？」

なんだよそれ？勇者ってアニメに出てくるようなものだよな…

『姫さまからのお呼びに預かり、勇者シンク、ただいま見参！』

「シンク…？」

あいつなにやってんだ…？しかも勇者って…

「ほう…、お主やつを知ってるのか？」

「ええ、友達です。そうか、あいつが勇者なのか…」

「……閣下！」

突然、部下であろう人が走ってきた。なにやら焦っているような…

「む？なんじゃ？」

「じ、実は……」

「……ふむ、そうか…。わかった。統夜といたな？わしについて来てくれるか？」

俺はいきなり閣下について来いと言われ、閣下に着いて行った。

そこは、砦というか本拠地というか…。とにかくそんなところに連れてかれた。

閣下は俺に手を差し出した。手の上には1つの指輪が置いてあった。

「統夜、お主にはこれから戦に参加してもらいたい」

「い、戦！？ちよつと待ってくれ、俺は人を殺すとか…」

「ん？なにを言っておる？この戦は人は死なん」

え…？

―説明中―

「な、なんだ…。そういうことなのか…。それでなんで俺に…」

「こいつに一度触れてみてくれ」

閣下が俺に見せたのは先程の指輪。

俺は恐る恐る触れる。すると指輪からすごい光が放たれる。

「え…？なんだよこれ…」

「これは冥剣レーヴァテイン。こいつは他の宝剣とは違ってこいつ自身が主を選ぶ。つまりこいつが使える人間はこいつが決めるということだ。これが先程お主が現れた時に急激に反応したようだな。もしかしたらと思ったのだがやはりそうであったか」

「ええっと、つまり俺はこいつに選ばれたと…」

「お主がここに現れたのはなにかの運命。統夜、我らに力を貸してくれるか？ガレットの勇者として」

そう言つて閣下は頭を下げてくる。

でもあの指輪に触れた時、なんか変な感じがした。

俺は…、こいつを知ってるのか…

考えても仕方ねえ。こういうのは…

「わかりました。力を貸します。勇者として」

動いて考えりやいいんだよ！

「礼をいうぞ。ではすぐに準備に取り掛かろう」

準備完了！

俺は戦闘用の服に着替えた。

そして現状も理解できた。どうやらシンクが来たことよってビスコッティ（さつき閣下に教えてもらった）側が、巻き返しているとのこと。

「さて統夜、準備はいいか？」

「ええ、いつでも。こいつもなかなか使えそうですし」

そう言い俺は両手に持っている銃を回す。

この銃は先程渡された冥剣レーヴァテインで、形状をイメージするとその武器が具現化されるようだ。

そして俺が選んだのがこの銃。

「やはり、それを選んだか…」

「え？なんか言いました？」

「いや、なんでもない」

閣下はマイクを持ち…

「ビスコッテイの犬姫ども！貴様らは勇者を召喚し戦況を覆そうとしている。だがそんなことは無用！貴様らは敗北する！なぜなら…、我らにもいるのだ！貴様らと同じ勇者が！」

閣下…、ハードル上げすぎ…

さて、やってやるか！

「刮目してみよ！我がガレット獅子団の勇者の姿を！」

俺もやってみるかね、シンクみたいに。

俺は高い場所からバク宙で飛び、着地すると両手に持つ銃をカッコよく回し構える。

決まった…

「閣下からのお呼びに預かり、ガレットの勇者、天月統夜。此処に参上！」

初陣

『ゆ、ゆ、勇者降臨ー!!まさかのレオ閣下も勇者を召喚していたとは!』

空中では実況のフランボワーズが叫んでいる。

俺はもう一度右手の銃を回す。

「へえ…、なんかすげー注目集まってるな…」

「そうに決まっておるだろう、お主は勇者なのだから」

「まあ、そうですね」

「では統夜、わしは先に行くぞ。お主は肩慣らしとして一般兵を倒してこい」

閣下は愛騎と共に駆け出した。

一応ルールは教えてもらったからあとは戦うだけだ。

さあ…、いくぜ!

「勇者統夜…、撃ちまくるぜ!」

俺はそう言って駆け出し、ビスコッティの一般兵と遭遇。

「うおっ、勇者だ」

「勇者倒したら俺ら凄くね!」

まったく、おまえらに倒されるわけないんだよ。

先制で俺は両手の銃を2人に撃つ。

頭を撃たれた兵士は、獣玉へと変わる。

フロニヤルドの戦ではこのように獣玉になって無力化することのこと。

さらに一般兵がうじゃうじゃと俺の元へとやって来た。

「へへっ、やれるもんならやってみろってな！」

俺は一般兵の大群をジャンプでかわし、空中で銃を連射。

大群は一瞬のうちに獣玉へ変わった。

「さて、次々と…、——ん？なんだ？」

空中のモニターで閣下の姿が映っていた。

相手はシンクと緑髪の女の子と戦ってるようだ。

戦いを見てると閣下が押ししてるみたいだな。強えな…

うおっ！閣下の使ってる斧からビーム出たぞ!?

あれか？ルール教えてもらった時に言ってた紋章砲ってやつか？

「勇者！お前はなんだ!?!戦いの邪魔をしに来たのか!?!」

「そっちこそ！僕のエリアで邪魔を——」

おいおい…、仲間割れしてんじやないかよ…

しかもシンのくやつあの女の子のこと押し倒してんじやねえかよ。

その時、閣下は再び紋章砲の構えを取っていた。

「獅子王炎陣、大・爆・破!!」

うわあ…、もう戦場が炎の海と化してるよ。

閣下の紋章砲は半端ないな。

さて、ここでもただの兵士倒すのも飽きてきたし、閣下のところでも行きますか

播り鉢エリアでは、レオ閣下の獅子王炎陣大爆破で周りの兵士は全て玉化している。
敵味方関係なく…

「フランボワーズ、確認せい。勇者と垂れ耳はちゃんと死んだか？」

『あーはい、しばしお待ちを…。ええつとー』

実況のフランボワーズがフィールド内を確認していると…

「オー、オー、そう簡単に、やられるか!!」

「にしてもこれ高すぎない!? ねえこれ高すぎない!?」

『そ、空、オー!? 勇者と親衛隊長無事です!』

なんとあの攻撃をまさか空まで飛んで交わしていた。

「協力だ。さっきのタイミング、今度は外さん」

「オーライ」

「よし…、オー行ってこい!!」

『蹴ったあー!!』

「ひでえー!!」

まさかの親衛隊長のエクレールは勇者シンクを空中で蹴り飛ばした。

落ちてくるシンクに閣下は斧で対応。

シンクの使う棒と撃ち合う。

シンクは押し負けるも立ち直し距離をとる。同時に反対側にエクレールが降りてきた。

そしてシンクとエクレールの同時攻撃。

レオも攻撃を防ごうとするも、自身の武器が砕けてしまった。

「たああー!!」

フィニッシュで2人の攻撃がレオの防具を破壊した。それに気づいたシンクは赤面する。

「チビと垂れ耳相手と思うて少々侮ったか。このまま続けてやっても良いが、それではちと両国民へのサービスが過ぎてしまうのお」

そう言いながら、モデルのようにポーズをきめている。

「レオ閣下、それでは…」

「うむ、わしはここで降参じゃ」

「バーン！バンバン!!」

『まさか…、まさかのレオ閣下敗北！総隊長撃破ボーナス350点が加算されます！』

ビスコッティ側に350点が加算され、点数はガレットを上回った。

『今回は拠点制圧ですので、戦終了とはなりません、このポイント差は致命的！ガレット側の勝利はほぼないでしょう！』

「やったあ！」

「やったであります！」

ビスコッティ側では、姫であるミルヒオーレと学院主席のリコッタが抱き合っていた。

播り鉢エリアでは…

「勇者よ。親衛隊長の助けがあったとはいえ、わしに一撃を入れたことは褒めてやろう。だが、今後同じ活躍ができるとは思うなよ」

「ありがとうございます、姫さー」

ピシッ！

シンクがレオに姫様と言おうとした時、レオの尻尾がピンとなった。

「閣下！」

「…っ、閣下！」

「うむ！」

レオは嬉しそうな顔をした。

「閣下との戦い、怖かったけど、楽しかったです！」

シンクが一言言った後、レオは尻尾をシンクの隣にいるエクレールに向けた。マイクを渡せとのこと。

シンクがエクレールにマイクを投げ渡すと…

「撮影班、垂れ耳によれ。良い絵が撮れるぞ」

レオがそういうので、撮影班はカメラをエクレールに向けた。

エクレールはマイクを受け取り、話そうとしたら…

服が破けた。

周りに静寂が流れた…

すると空中に映像が…

見るとシンクとエクレールがレオに止めを刺した際に、シンクの棒の先がエクレールの服に当たっていた。

動かぬ証拠、発見！

「あー！！！！」

『勇者、なんと自軍騎士に誤爆！！防具破壊を超えて、服まで破壊してしまいました！』
「あら…」

城にいるミルヒオーレとリコッタも苦笑い。

「ふっはははは、また来るぞ！今度はきっちり侵略してやろう！」

「ま、待つてください閣下」

レオがこの場を去ろうとした時、シンクが引き止める。

「なんじゃ？」

「あの…、統夜のことなんですけど…」

「む？統夜はガレットの勇者となった。それがどうしたのだ？」

「いや、ええつと…。どうして統夜は…」

その時…

1つの閃光がシンクの足元に落ちた。

「うわあっ!？」

「む？来たか…」

レオがそう言い、揺り鉢エリアの外を見ると…

「さてシンク、こっからは勇者同士の勝負といこうじゃねえか」

右手にスナイパーライフルを思わせるようなライフルを持つ続夜の姿だった。